

談話における「注目求め」

チューシー・アサダーユット

0. はじめに

言葉は媒体によって話し言葉と書き言葉に分けられる。話し言葉は、基本的にその瞬間のコミュニケーションなので、時間という条件があるものである。話し手は、自分の意図や物事を相手に伝える時に、自分が頭の中に考えている物事をそのまま音声に替えて相手の耳に入れて理解させる。その瞬間のコミュニケーションなので、話し手が言い終わっていないうちに、相手は話し手の言いたいことが分かり、すぐに話し手に反応することもできる。又、相手の聞いている都度の態度も見ながら話を続けなければならない。すなわち、話を始める時に相手が正確に聞いてくれるかどうか、又話している間に、相手が正確に聞いていて理解しているかどうかという相手の態度を判断しながら、発言する。その為、話し手は相手が自分の言っている話題に関心を持つようにアピールもしなければならぬだろう。これは、書き終わって相手に見せない限り、相手の態度はどうか分からない書き言葉と違うところである。

本研究は、談話に表れる、聞き手に話し手が言い終わるまで聞かせる談話の基本的な「注目求め」形式を説明する試みの一つである。

1. 「注目求め」の定義と分類

1.1. 「注目求め」の定義

「注目求め」とは、相手に気付かせたり相手の関心を引いたりする態度である。具体的に説明すると、相手に自分の言いたいことを聞かせるために相手の名前を呼ぶことや、相手が聞いているかどうかという不安を感じているために相手に内容を押し付けることなどである。

談話全体を分析している先行研究を考察してみると、本研究で言っている「注目求め」に似ている用語もあるので、「注目求め」とはどのように違うかということを説明しておく。

まず、ザトラウスキーの「注目要求」との違いに関して、ザトラウスキーは「注目要求」について以下のように述べている。

<注目要求> 「呼びかけ」の類。(1A「もしもし」、2B「もしもし?」、19B「あのね?」)
<談話表示>と似たような機能を持つ。

(ザトラウスキー:1993, p. 67)

又、談話資料の分類を見ると、ザトラウスキーが言っている<注目要求>は大体感動詞である。しかし、実は相手に注目を求める談話表現はそれだけでなく、次のように「いいですか」や間投助詞や終助詞などにもその「相手に注目を求める」機能がある。

(1) ④あの、これだったら、危なくないし、怖くない。

④いいですか。

④これが正義の味方、庶民の友でございますからね。(独話A)

(1)のように、④が終わってから、④が始まる前に聞き手の関心を引くために「いいですか」と発言した。この「いいですか」は文レベルでは問いかけ文と言われるが、談話レベルで考察

すると、聞き手に質問をするのではなく、次の発言をする前に聞き手に注目を求めているのである。又、④にある終助詞「ね」も聞き手に注目を求める形式の一つだと解釈する。ザトラウスキー(1993)では、終助詞と間投助詞の機能を無視して、共起している内容を主として考えている。④の場合は、ザトラウスキー(1993)によって機能を延べれば、「情報提供」という発話機能になる。しかし、本研究の立場では、「情報提供+注目求め」だと判断する。

次に、「パトス」という用語もある。メイナード(2001)では、パトス(Pathos)¹は話し手が、聴衆の感情にアピールするような説得術であると説明している。これもここで言っている「注目求め」に近いが、パトスは理論的なものであり、全ての感情を相手に伝えるものである。一方「注目求め」は具体的なもので、言語形式で見られるものだ。それに、パトスの目的は聞き手を感動させる為である一方、「注目求め」の目的は聞き手とのその瞬間のコミュニケーションを成功させる為である。

以上で、「注目求め」の定義及び先行研究に使われている用語との比較を説明した。このように解釈すると、文法形式だけでなく、音声形式、語句形式などの「注目求め」の機能を持っている要素もあるだろう。例えば(1)の例文にある発話④である。「正義の味方」などの語句は販売している調理具と全然関連性がなく、この談話にふさわしくない。しかし、話し手が扱った理由は聞き手の関心を引く為ではないか。関係ない、あるいは不自然、あるいは異常な語句を使う以外に、異常なイントネーション、異常な発音、異常な身振りも注目求めという機能を持っている。

1.2. 「注目求め」の分類

どの発話が「注目求め」という発話機能を持っているかということを分析する時には、その発話に「注目求め」という機能を持っている要素があるのかということも考えねばならない。

「注目求め」は様々な要素で作られる機能なので、まず要素を分類したい。又、非言語にある「注目求め」要素もあるが、言語しか考察しない本研究では分類の対象外とする。

- 1/文法要素：感動詞 例え、ねえ、ほら、あのさー、おい、ちょっと、もしもし等
呼びかけとして働く名詞句 例え、先生、〇〇君等
間投助詞 例え、ね、さ等
終助詞 例え、ね、よ、さ等

2/表現要素：例え、いいか、いいですか等

3/音声要素：例え、「あぶねえ」というわざと異常な発音をすること等

4/語句要素：例え、「シクヨロ」という「よろしく」の逆に読む挨拶等²

資料データの限界の問題の為、本研究の考察は音声要素と語句要素を対象外とする。

2. 資料分析

本研究では、執筆者が自分で録音して文字化した[独話 A]と[対話 B]と、『文章・談話のしくみ』の[談話 1]（ここでは、[対話 D]と呼ぶ）と[談話 5]（ここでは、[独話 C]と呼ぶ）を利用して、分析してみる。2つの種類に分けると、1つ目は独話であり（[独話 A]、[独話 C]）、もう1つは対話（[対話 B]、[対話 D]）である。

[独話 A]は調理道具の実演販売の発話である。文字化されたデータは2分15秒である。場所

は JR 秋葉原駅の近くの広場である。聞き手は 20 人以上の通過者である。

[対話 B]は大学の事務サービスについての発話である。文字化されたデータは 4 分 57 秒である。場所は東京国際交流館である。話し手 A と話し手 B はお互いに知り合いではないが、「大学の事務サービス」について意見を述べるように頼まれて、紙に書いている項目を読んで討論するという形になっている。よって、文字化されたデータの中で斜体の文字で書いた部分は質問を読む部分である。

[独話 C]は『文章・談話のしくみ』の共用資料[談話 5]である。内容は研究発表についてである。

[対話 D]は『文章・談話のしくみ』の共用資料[談話 1]である。内容は電話による勧誘についてのことである。発話した人は全部 3 名であるが、交代の形なので、対話と言える。

資料を分析するために、ザトラウスキー(1993)による発話機能の分析方法を参考にし、少し工夫を加えた。間投助詞がついている句節も分析できるように、間投助詞がついている句節に分けるが、前後の句節の差がない場合には分けない。

本研究に扱っている用語の範囲の理解のために、ザトラウスキー(1993)の発話機能と比較しておく。

ザトラウスキー	本研究	ザトラウスキー	本研究
注目要求	注目求め	談話表示	談話表示
共同行為要求	行為要求	情報提供	情報提供
単独行為要求		意志表示	
情報要求	情報要求	言い直し	
言い直し要求		関係作り・儀礼	
同意要求		注目表示	注目表示

2.1. 独話にある「注目求め」

本研究でいう「独話」とは、自分と話すという意味でなく、不特定の聞き手に話し、又その不特定の聞き手が言葉で対応することができないことを示す。この「独話」は、例えば、スピーチ、弁論大会、プレゼンテーション、説明会、研究発表などである。

独話の場合、聞き手が話す権利を持たないが、[独話 A]のような実演販売のプレゼンテーションなどでは、聞き手が話し手の独話を無視して場所から出ることができる。一方、弁論大会やスピーチの場合、どんなにつまらない話を話しても聞き手が場所を出ることは失礼なので、そこで話が終わるまで聞かなければならない。よって、話し手はどうすれば聞き手が自分が発言する内容を進んで聞いてくれるかという注目の求め方を考えなければならない。基本的な表現から見ると、聞き手に注目を求めることもよくある。結果は次のようである。

[独話 A]の分析結果からみると、全部の発話数 58 件の中で、情報提供は 40 件、情報要求は 7 件、談話表示は 5 件、行為要求は 9 件、注目求めは 24 件である。全発話数で注目求めの要素が出るのは 41.37%である。

「注目求め」が出た発話は次のページの表のようである。

表1[独話A]の「注目求め」分析

発話	発話内容	情報 提供	情報 要求	談話 表示	行為 要求	注目 求め
2	あ、今度ね、皮むき多分。	○		○		○
4	そうするとね、色んな皮剥けますから。	○				○
8	さあ、覚えて帰りましょう。				○	○
10	ま、覚えて帰れば、今日からは夢のような生活ですからね。	○		○		○
11	お嬢さん、ちょっと前に近づいてください。				○	○
12	ごめんなさいね。	○				○
14	皆さん、いいですか。					○
15	クリーナーは買わなきゃだめよ。	○				○
19	見えます？					○
21	サラダにいいし、ピザにいいしね。	○				○
23	これ意外と包丁じゃ難しいですよ。	○				○
25	ねえ、ねえ、お客さま、これ見てると、何か一つ気になんない。		○			○
26	こっち側、野菜が段々ちっちゃくなりますね。	○				○
29	皮むきってね、これ平らなところは切れません。	○				○
32	これ皆同じですね。	○	○			○
33	ですからね、最後だけ。	○		○		○
38	これね、喜ばれたのがにんにくの薄切りなんか楽よ。					○
41	いいですか。					○
42	これが正義の味方、庶民の友でございますからね。	○				○
46	例えば、きゅうり、こすればきゅうり料理ね、こんなことができます。	○				○
48	皆さん、喜んで、これがいい。	○			○	○
49	あのね、おんなじきゅうりでも、横に寝かすでしょう。		○			○
50	こうなるととたんに包丁じゃできないもんですよ。	○				○
59	秋葉原ね、教えといてあげてください。				○	○

「注目求め」の機能を持っている発話では、「注目求め」感動詞は3件（ねえ、あのね、さあ）、呼びかけ語句4件、間投助詞「ね」7件、終助詞「ね」6件、終助詞「よ」3件、表現3件（いいですか、みえますか？）である。

更に、他の発話機能と共起するかどうかを考察してみると、「情報提供」との場合は15件、「情報要求」との場合は3件、談話表示との場合は3件、行為要求との場合は4件である。

[独話C]の分析結果からみると、全部の発話数49件の中で、情報提供は43件、情報要求は3件、談話表示は42件、行為要求は2件、注目求めは11件である。全発話数で注目求めの要素が出るのは22.45%である。

「注目求め」が出た発話は次のページの表のようである。

表2[独話C]の「注目求め」分析

発話	発話内容	情報提供	情報要求	談話表示	行為要求	注目求め
2	えー、言語行動研究部、行動ですね、あの、行く、動くと書く行動、えー、言語行動研究部というところに属しております、えー、その言語行動と いうことを考えながら、えー、特にまあ、敬語とか、えー、待遇表現、えー、もう、それを調べる仕事を分担しております。	○		○		○
5	その中で、ふだん、その、言語行動とか、待遇表現とか言って、えー、フィールドワーク出かけて、調査をしたり研究をしたりするわけですけども、えー、ちょっと、初めから変な話で申し訳ないんですが、その、問題の言語行動とか、えー、待遇表現という、そのことがらをどう考えるべきか、その中身ですね、それがどうも実は、あのー、はっきりしていないのではないかと、という、そういう思いを、日頃モヤモヤと、こう感じながら、えー、仕事を続けてきております。	○		○		○
8	で、今日、お聞きいただく発表も、そのような、問題、つまり、その、言語行動、とか、待遇表現、とかを、その、考える、その手がかりですね、手がかりについて、一つ的话题を、ま、選んで、ご批判をいただければと思って、えー、おります。	○		○		○
12	えー、今日の論点は、その発表の題目にあります、その、「言語行動を説明する言語表現」という、一群のですね、あるグループをなす表現が、その手がかりになるんじゃないか、あるまいかと、ふだん考えているところをお聞き頂きたいと思うんですが、えー、最初にまず、その、この言語表現、いったいどういうものであるのか、そういうところから、ご説明したいと思います。	○		○		○
20	えー、で、そこに書きましたように、その、非常に素朴な感想とし、してひとこと言えばですね、その、申し上げると書いている、その「ご祝詞はどこにあるのか」と、そういうことであります。	○		○		○
26	これもやはり書き言葉ですが、掲示版でですね、あたまたの部分に、その、大きく「提示」と、こう書いて、そしてその下に中身が書いてある、そして掲示版に貼ってある掲示物、なども、あの、不思議といえば不思議だと思ってしまうのでしょうか。		○	○		○
28	その「提示」と書いてですね、えー、貼ってありました。	○		○		○
35	えー、ちょっと読んでみますと、そのつどの言語行動場面において、話し手あるいは書き手が、ですね、自身が、これからどんな種類の言語行動をしようとしているのか、あるいは、いまどんな種類の言語行動をしたか、これを、えー、具体的な行動表現をもって、明示的に、言葉に、えー、聞こえたり読めたりするような形で、えー、言った、書いた、そういう言語表現。	○		○		○

42	えー、5ページの箇条書きの番号で言えば、うしろの方ですね、3とか4にかかげたような、点にあたると思います。	○		○		○
45	で、ま、最初に申しますと、この、点を考えることを通じてですね、これを手がかりにして、その一、それぞれの言語行動がどんな言語行動であるのかをつかむ、きっかけがえられるだろう。	○		○		○
47	えー、6ページの、あの、1.3と1.4、補足1、補足2というところ、これは、あの、問題の、その、言語行動について、えー、今日ここで扱うこと以外に、横にどんな広がりがあるのか、あるいは、その、具体的には、具体的な発話とか文章の中にどんな表れ方をするのかについて、あの一、大きなタイプに、それぞれ分けてですね、えー、示しておきました。	○		○		○

「注目求め」の機能を持っている発話では、間投助詞「ね」は11件である。[独話A]と比べると、[独話C]では、敬語や丁寧語をよく使っている為に、場面の改まり度が高いと考えることができる。このような丁寧語と共起しやすい「注目求め」要素は間投助詞「ね」あるいは終助詞「ね」に他ならない。

更に、他の発話機能と共起するかどうかを考察してみると、「情報提供」との場合は10件、「情報要求」との場合は1件である。

研究発表の場合、聞き手が話し手が発言することをきちんと聞いている為に、実演販売のように何回も聞き手の注目を要求する必要がないのだろう。[独話C]の「注目求め」として働く間投助詞「ね」の発生の頻度を見ると、4発話に対して1件出ることになる。

独話の特徴は、共話を作ることができない、つまり注目表示という機能が存在していない為、聞き手がどのくらい話し手の発言している内容が分かるか、又話題を変える時に明確に聞き続けてくれるかどうかということに関しては、話し手がかなり不安を覚えやすいことである。だから、「注目求め」要素が約4分の1も出ることには不思議ではない。

尚、1つの発話に2つから以上の発話機能があることもあり得る。例えば、

(2) ⑱ ここのわっかわっかをこうやってこするの。

⑲ 見えます？

⑳ これ、輪切りです。

(独話A)

基本的に上昇イントネーションは問いかけ(情報要求)という機能を持っているが、この場合、話し手は聞き手に自分がやっていることが見えるかどうかと聞く、一方自分が見せたいことを聞き手に見てほしいという注目求めとしても解釈できる。

2.2. 対話にある「注目求め」

「対話」の場合に、話し手の話す態度と聞き手の聞く態度によって「注目求め」要素の使用頻度が異なる。例えば、あまり「注目表示」がでないなら、聞く態度があまり良くないとも考えられる。その時、話し手は普通の対話より「注目求め」要素を使わなければならないであろう。逆に、普通の対話では、よく相手からの「注目表示」を受け取る場合に、「注目求め」をたくさん使う必要もないはずである。この部分は、資料データを考察して確認したいと思う。

[対話B]の分析結果からみると、全部の発話数100件の中で、情報提供は52件、情報要求は

6件、談話表示は38件、注目求めは11件、注目表示は41件、である。全発話数で注目求めの要素が出るのは11%である。(注目表示は41%である。)

「注目求め」が出た発話は次の表のようである。

表3[対話B]の「注目求め」分析

話者	発話	発話内容	情報提供	情報要求	談話表示	行為要求	注目求め	注目表示
B	3	え、やってそのあと、修士を、今1年目(めー)いるところですね。	○				○	
B	17	僕、リブツの友達とかでは、東工大の先生とか//いるんですよ。	○				○	
B	19	僕自身は、そういうことしたことがないんですね。	○				○	
B	45	すごく態度がでかいような気がするんです//よね。〈笑〉	○				○	
A	47	僕は、大学のその総合的なサービスで、え、今まで不都合感じたり、えー、不満に思ってることはないですね、特に。	○		○		○	
A	54	でも、あ、例えば、その、卒業する時にね、	○		○		○	
A	56	えっ、なんか、提出、あ、大学院の入学手続きをしなければいけなかったんですよ。	○		○		○	
A	60	で、僕はその時海外旅行に行く予定があったんですね。	○		○		○	
A	68	まあ、比較的満足してますね、//今まで	○		○		○	
B	89	ならんで、最近はやっばり改善、すごい改善されてきたなあ//と思いますけどね。	○				○	
A	93	だから就職活動の時に、成績証明書とか健康診断書とか、卒業証明書とか、なんか結構緊急に必要になったりしますよね。	○		○		○	

「注目求め」の機能を持っている発話では、間投助詞「ね」は1件、終助詞「ね」は6件、終助詞「よ」は2件、終助詞「よね」³⁾は2件である。

更に、他の発話機能と共起するかどうかを考察してみると、全ての「注目求め」は「情報提供」と共起していることが分かる。

[対話B]の場合、話し手Aと話し手Bは自分の経験や意見を述べるので、話し手Aは自分の経験を伝える時に、話し手Bは聞き手になり、その場合、話し手Bは「注目表示」発話を出したり、質問を出したりする。一方話し手Aは連続して発話を出す為に、たまに「注目求め」発話を出すだろう。この[対話B]の結果を独話と比べると、発話量が多い場合、「注目求め」発話も多くなるとも考えられる。ただ「対話」の特徴には「独話」にない「注目表示」発話がある為、話し手は聞き手からその「注目表示」を受けたら、再び「注目求め」を頻繁にしなくても良いであろう。

[対話D]の分析結果からみると、全部の発話数78件の中で、情報提供は39件、情報要求は5件、談話表示は18件、行為要求は3件、注目求めは9件、注目表示は27件である。全発話数

で注目求めの要素が出るのは 11.54%である。(注目表示は 34.62%である。)

「注目求め」が出た発話は次の表のようである。

表 4[対話 D]の「注目求め」分析

話者	発話	発話内容	情報提供	情報要求	談話表示	行為要求	注目求め	注目表示
Y	2	もしもし？					○	
H	10	もしもし。					○	
Y	12	もしもし。					○	
Y	23	あの、実はねー？	○		○		○	
Y	27	で、6日がS君の誕生日だったんですね//ー？	○		○		○	
Y	31	あの、Pさんがねー？	○		○		○	
Y	35	で、Oさんと3人で、きょう、ケーキ、シーゲルの買ったのね？	○		○		○	
Y	57	(だい) うーん、すぐ終わっちゃうと思うのねー、	○		○		○	
H	63	じゃ、丁度いいです// (ね)。	○		○		○	

「注目求め」の機能を持っている発話では、感動詞は 3 件、間投助詞「ね」は 1 件、終助詞「ね」は 6 件、終助詞「よ」は 2 件、終助詞「よね」は 2 件である。

更に、他の発話機能と共起するかどうかを考察してみると、全ての「注目求め」は「情報提供」と共起していることが分かる。

[対話 D]が[対話 B]と違うところは、相手の非言語的な反応を見ることができない電話による対話であるという点である。このことは、話し手が聞き手の注目を求める原因になるだろう。しかし、[対話]に出る「注目表示」も頻繁に出る為に、聞き手に情報を伝えるかどうかという不安が減ってくるだろう。その為に、この対話にある「注目求め」の機能を持っている発話が少ないのである。又、電話に出る相手に自分が存在していることを注目させる「もしもし」も出るので、「もしもし」を含めなかったら、発話話題に関する「注目求め」の行動が更に少なくなる。

以上で、4つの発話資料を考察した。考察の結果、以下のような仮説が出た。

- 1/ 独話の場合、話し手は聞き手から明確に「注目表示」を受け取らない為、「注目求め」の機能を対話の場合より扱う。
- 2/ 対話の場合、話し手は「注目表示」を受け取る為、「注目求め」発話の使用はあまり多くない。
- 3/ 独話にせよ対話にせよ、話し手の発話量が多ければ、多いほど、「注目求め」として働く発話も多くなる。言わば、話し手 A が話し手 B に発話交代をさせない場合の方が、話し手 A が話し手 B とよく発話交代をする場合より「注目求め」発話が多い傾向がある。

独話 > 発話量が多い対話 > 発話量が少ない対話

3. 「注目求め」を表す言語形式

分析した資料によれば、「注目求め」という機能を持っている発話がたくさん見られる。これは、その発話が「注目求め」の要素を持っているからである。この項目では、それぞれの「注目求め」の機能を持っている要素を言語形式によって考察し、機能を下位分類してみる。

3.1. 感動詞

あのね、ねえ、さあ、ほら、やあ、おい、もしもし等。

「注目求め」を持っている感動詞の中でも若干異なる。例えば、「ねえ」と「おい」の場合には、「おい」は聞き手に自分の発言を始める前に注目を求め、それに、聞き手に自分が存在していることを注目させることも機能の一つである。この場合、話題がない挨拶などの発言に扱う。例えば、

(3) A:おい。(注目求め)

B:うん。(注目表示)

(作例)

一方、「ねえ」は聞き手に自分が存在していることを注目させる機能を持っていない為、「ねえ」を使う時に、必ず話題が続く。

(3') ×A:ねえ。

B:うん。

(3'') A:ねえ。

B:うん?

A:今日渡君が病気なんだよ。知ってる?

「おい」と同じ感動詞は「やあ」「もしもし」

「ねえ」と同じ感動詞は「あのね」「さあ」「ほら」

「もしもし」の場合は、聞き手が注目した後、話し手は話題を発言することが殆どだが、基本的には聞き手に発言を始めることを注目させるのではなく、聞き手に自分が存在している、言わば自分の方を向いて存在を認識するように注目を求める。

3.2. 呼びかけ名詞句

「お嬢さん、皆さん」などの呼びかけ名詞句も「もしもし」という感動詞と同じように、自分が存在していることを聞き手に注目させる機能を持っている。又、聞き手に自分の話について注目を求めることもできる。例えば、

(4) ㊟ねえ、ねえ、お客様、これ見てると、何か一つ気になんない?

(独話A)

3.3. 間投助詞

現代語によく使われている間投助詞は「ね」と「さ」である。どちらも「注目求め」という機能を持っている。「あの一」「ええと」「まあ」などの間投用法がある語句は発話のフィラーとして働くが、「ね」と「さ」はフィラーではなく、自分が発言したまだ完成していない句節を聞き手に注目させて認識させるのだ。

間投助詞は句節の後ろに付く為、話し手が話している内容を句節に切ってその内容を聞き手に注目させる機能を持っている。間投助詞は基本的に話を始めることについて聞き手に注目を

求める機能を持っていないが、フィラー(Filler)である感動詞と共起して、話を始めることを注目させる機能を持つことができるのである。例えば、「なんかね」「ええとね」⁵等。

「ね」と「さ」は「注目求め」の要素であるが、「ね」は聞き手と情報を一致させるために聞き手に注目を求める記号であり、「さ」は話し手にとって当然な情報を押し付けるために聞き手に注目を求める記号である。外観的に見れば、「ね」の方が「さ」より丁寧である。

3.4. 終助詞

「ね」「さ」「よ」「ぞ」「ぜ」「わ」などの終助詞は「注目求め」という機能を持っている。これらの終助詞を使って文を構成すると、その文は全体的に「情報要求」にせよ「情報提供」にせよ他の機能を持っているのなら「注目求め」という機能がなくなる訳ではない。だから、終助詞が表れる文は「内容の中の機能+注目求め」と解釈する。

例えば、[独話 A]の発話^⑧「これね、喜ばれたのがにんにくの薄切りなんか楽よ。」

(5)

これね、喜ばれたのがにんにくの薄切りなんか楽よ。		
句節 a	句節 b	
注目求め	情報提供	注

(表の「注」は「注目求め」である)

「さ」「よ」「ぞ」「ぜ」「わ」は話し手が聞き手に自分が発言した内容を押し付ける「注目求め」要素である。この5つの終助詞の間の相違点は、上野(1974)、陳(1987)を参照する。

しかし、「ね」は上記の終助詞と異なって、様々な発話機能を持っている。「あなたは山田さんですね。」の「ね」は「情報要求」、言わば「確認要求」である。(ザトラウスキー(1993)では、「同意要求」と呼ぶ。)このような発話は、「注目求め」の機能は「情報要求」より弱い。だから、この発話を判定するなら、「情報要求+注目求め」あるいは「情報要求」だけにしてもできるだろう。逆に、「がんばってね」の「ね」は「注目求め」の機能が強い。このような発話なら、「行為要求+注目求め」にし、「注目求め」を抜きにすることができないだろう。

このように述べると、「情報量」によって、行為要求と情報提供⁶などの発話では、話し手の情報量のほうが聞き手の情報量より多いから、「注目求め」という機能も強いであろう。一方、情報要求の場合、話し手の情報量の方が聞き手の情報量より少ないために、「注目求め」という機能が少しかある、あるいは無いと言っても良い。だから、「情報要求」(ザトラウスキーの「同意要求」)の発話にある「ね」は「注目求め」という機能を持っていないと結論できる。

尚、[対話 B]に出る「よね」という終助詞も「情報量」によって、「注目求め」を持っているかどうか判断する。例えば、このような例は「注目求め」を持っている発話だと解釈する。

(6) (大学の事務サービスについて、話し手 B は違う大学で勉強している話し手 A に話す)

B42 「何言ってるんだお前は」みたいな、こう、要するに申し、なんかこう、

B43 威圧的というか、

A44 ええ

B45 すごく態度がでかいような気がするんです//よね。{笑}

A46 うーん (対話 B)

一方、このような例では、「よね」は「注目求め」ではなく、「情報要求」(ザトラウスキーの

「同意要求」)の発話だと考えられる。

(7) A24 総合的なサービス、さっき言いましたように図書館だったり、生協だったり、が
//入る。

B25 あっ

B26 まあ、なんでも入ってくるんですね。

B27 はい。

(対話 B)

以上で、終助詞について述べた。又、終助詞は間投助詞と同じように、話し手が話している内容について聞き手に注目を求めるものである。

3.5. 表現

[独話 A]から発見した「いいですか」という表現は文レベルで考察したら、問いかけ文だが、この独話では「情報要求」のではなく、「注目求め」として働くものである。「いいですか」は聞き手にこれから自分が発言する物事を注目させる表現である。

(8) ⑭皆さん、いいですか。⑮クリーナーは買わなきゃだめよ。(独話 A)

又、「見えます？」の表現も普通は情報を要求する表現だが、[独話 A]などでは「はい、見えます」と応答し難い。この「見えます？」は話し手の行動あるいは自分の物を聞き手に注目させる表現だと解釈する。

(9) ⑯このわっかわっかをこうやってこするの。

⑰見えます？

⑱これ、輪切りです。

(独話 A、(2)と同じ)

3.6. まとめ

3.1. から 3.5. まで「注目求め」の言語形式を述べて、このようにまとめられる。

言語形式		「注目求め」の下位分類
感動詞	ねえ 等	話し手が自分の話を始めることを聞き手に注目させる
	おい 等	話し手が自分が存在していることを聞き手に注目させる
	ほら 等	話し手が自分の行動・物について聞き手に注目をさせる
呼びかけ語句		話し手が自分の話を始めることを聞き手に注目させる 話し手が自分が存在していることを聞き手に注目させる
間投助詞		話し手が自分が話している内容を聞き手に注目させる
終助詞		話し手が自分が話している内容を聞き手に注目させる
表現	いいですか等	話し手が自分が話を始めることを聞き手に注目させる
	見えます？等	話し手が自分の行動・物について聞き手に注目をさせる

上記の表を「注目求め」の下位分類によって整理すると、次のページの表のようになる。

	下位分類	言語形式
1/	自分が存在していることについて注目を求める類	感動詞：もしもし、おい 等 呼びかけ語句：〇〇君、先生 等
2/	自分の話について注目を求める類	
	2.1/ 話を始めることについて注目を求める類	感動詞：ねえ、あのね 等 呼びかけ語句：〇〇君、先生 等 表現：いいですか 等
	2.2/ 話している内容について注目を求める類	間投助詞：ね、さ 等 終助詞：ね、さ、よ、ぞ、ぜ 等 (終助詞「ね」の場合、情報要求の発話に表れる「ね」の以外である)
3/	自分の行動・物について注目を求める類	感動詞：ほら 等 表現：見えます？ 等

4. おわりに

以上で、どのように「注目求め」の発話機能が出るか、又「注目求め」を持っている要素（言語形式）を紹介し、分類してみた。本研究はただ一考察なので、独話と対話、更に2人以上の会話に出る「注目求め」はどのように表れるか、どの発話機能と共起できるかできないかという疑問に対してはまだ完璧とは言えない。尚、資料データが限られている為に、結果はまだ正確ではないだろう。これから、更に独話・対話の資料を集めて分析すれば、「注目求め」についての研究は正確になるだろう。

更に、本稿では指示表現を発話の内容として考察したが、[対話B]の「こう」のような指示表現は「注目求め」機能を持っているようなので、今後の課題とする。⁷

一方、日本語教育の面を考えると、「注目求め」の表現はあいづち等の「注目表示」の表現と同じようにまだ教育されていない。文法でも、間投助詞の使用や終助詞の談話レベルの機能なども中・上級の日本語教育の項目になっていない。このようなことを踏まえると、学習者は「注目求め」について指導を受ければ、日本語をより自然に適切に使えるのではないか。

注

¹ パトス(Pathos)はアリストテレスによって名づけられたものである。

² 漫画に出ている例。山根和俊(2000)『巖流』1、集英社

³ 「よね」は「よ」と「ね」の複合終助詞と考えられる。「よね」の「ね」は基本的に、確認を要求する機能を持っているので、その「よね」が付いている発話は「情報要求」の機能を持つようになる。言わば、「だろう？」や「じゃないか」や確認要求「ね」と同じ機能であるが、次のような発話では、「よね」の「ね」は「確認」でなく、「注目求め」という機能を持っている為、「よね」になってもその機能はなくなる。

B45 すごく態度がでかいような気がするんです//よね。〈笑〉

A46 うーん。

Bは自分の大学の事務サービスについて話して、違う大学で勉強しているAに注目させる。この事柄から考えると、「よね」は「確認要求」と解釈できない。

⁴ 「よね」は「よ」と「ね」の複合終助詞と考えられる。「よね」の「ね」は基本的に、確認を要求する機能を持っているので、その「よね」が付いている発話は「情報要求」の機能を持つようになる。言わば、「だろう？」や「じゃないか」や確認要求「ね」と同じ機能であるが、次のような発話では、「よね」の「ね」は「確認」でなく、「注目求め」という機能を持っている為、「よね」になってもその機能はなくなる。

B45 すごく態度がでかいような気がするんです//よね。〈笑〉

A46 うーん。

Bは自分の大学の事務サービスについて話して、違う大学で勉強しているAに注目させる。この事柄から考えると、「よね」は「確認要求」と解釈できない。

⁵ 現在、「あのね」は感動詞だと考えられるが、「ええとね」「なんかね」はまだ感動詞ではないと考えられている。元は「あのね」は「あのー+間投助詞ね」、「ええとね」は「ええと+間投助詞ね」、「なんかね」は「なんか+間投助詞ね」である。又、「あの」「ええと」「なんか」はフィラー(Filler)である感動詞である。同じように、「あの」と「なんか」は間投助詞「さ」と共起して「あのさ」「なんかさ」という「注目求め」要素が出来る。但し、「あの」というフィラーは「注目求め」要素として働く場合もある。

Y: あの、実はねー？

B: はい。

Y: 4日がBさんとGさんの誕生日で一、

B: ええ。

この「あの」は「あのね」や「ねえ」と違わない。

⁶ 文法から見ると、「働きかけ文」と「叙述文」である。

⁷ 又、「こう」をフィラーとして扱った例も出ている。例えば、[対話B]の発話B42である。

参考文献

上野田鶴子 (1974) 「終助詞とその周辺」『日本語教育』17、p. 62-77、日本語教育学会

佐久間まゆみ他 (1997) 『文章・談話のしくみ』おうふう

ザトラウスキー、ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版

陳常好 (1987) 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』6-10、p. 93-109、明治書院

寺村秀夫他 (1990) 『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう

メイナード、K・泉子 (2001) 『恋するふたりの「感情ことば」』くろしおカブックス

追加資料

別紙1: 「独話A」の分析表、全1頁

別紙2: 「対話B」の分析表、全2頁

別紙3: 「独話C」の分析表、全2頁

別紙4: 「対話D」の分析表、全2頁